

# 令和2年度卒後セミナーに参加して

社会医療法人 長崎記念病院 リハビリテーション部  
近藤祐太郎 (保健学科 14 期生)

令和3年3月20日、令和2年度長崎大学理学療法学会同門会卒後セミナーが開催されました。今回は新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、保健学科101講義室とオンライン配信のハイブリッド形式となりました。

特別講演として長崎大学病院の高島英昭先生より「理学療法士に必要な栄養学の基礎知識」、長崎リハビリテーション病院の西岡心大先生より「臨床における栄養管理の実践：理学療法士への提言」というテーマについてご講演いただきました。シンポジウムでは、オンラインでご参加いただいた国立がん研究センター中央病院の福島卓矢先生から話題提供していただいた上で、101講義室の高島先生と西岡先生をオンライン上の福島先生とつなぎ、今回のセミナーのテーマである「理学療法を高めるための栄養学」について医師、管理栄養士、理学療法士の立場から、貴重な意見を聞かせていただきました。

高島先生のご講演の中では、まず、五大栄養素や低栄養の定義など栄養学に関する基礎知識を説明していただきました。加えて栄養不足による弊害や問題点、早期対応のシステム構築や介入戦略について、最新の知見や長崎大学病院の取り組みをもとに詳しくお話ししていただきました。その中で印象的だったのは、低栄養の状態にはエネルギー投与が効果的と言われていますが、エネルギー投与はとにかく多ければ良いという訳ではなく、状態に応じた適切なエネルギー投与が必要だということでした。具体的には、ICU入室時の患者は、侵襲や不動により異化亢進状態であり、この時期に身体の外部から過剰に栄養投与されると、オートファジーの活動不全を引き起こし、予後不良になりやすいため、必要摂取エネルギーの60%程度から全身状態の改善に合わせて徐々に増加させていくことが、結果的に早期の回復につながるということでした。また、そのような急性期においても筋の不活動を是正するために電気刺激などを用い

た筋収縮運動を促すことで、その後の理学療法を効果的に展開できることを学びました。

西岡先生のご講演の中では、低栄養と機能障害・能力障害の関わりについて説明していただきました。加えて、理学療法士が行うべき栄養のスクリーニング方法や運動療法、身体活動に伴うエネルギー出納の方法などの最新の知見を踏まえて丁寧にお話ししていただきました。その中で回復期においては、運動に合わせて栄養をとる「攻めの栄養療法」を行うということが印象的でした。これは、理学療法で行う身体活動量を管理栄養士と共有し、必要なエネルギーを日々の工夫された献立や栄養補助食品にて補えるように取り組むことで、低栄養に対して効果が出やすくなるというものでした。この必要エネルギーの算出は、ハリス・ベネディクトの式を用いて行うことが多く、身体活動量に合わせた活動係数を用いるため、日々の身体活動量の把握が重要であると学びました。また、効果判定として1週間毎の体重の推移を確認し、経過を追うことも改めて重要であると学びました。

シンポジウムでは、話題提供者の福島先生からがん患者に関わる理学療法士は筋機能障害のマネジメントを行うことが重要であり、多職種協働で運動療法と栄養療法を併用したアプローチを行った症例を報告していただきました。その後に医師、管理栄養士、理学療法士の立場から、多職種協働の意義や栄養状態に焦点を当ててゴール設定を行っていく取り組み、急性期や回復期での現場で体重や全体像の変化に着目し、多職種で情報共有を行い、状態に応じた栄養管理の取り組みについてご紹介いただきました。今回のセミナーのテーマである「理学療法の効果を高めるための栄養学」には多職種で情報交換・連携を取り、栄養状態の問題に気づき、理学療法を進めていくことが必要であると学びました。

今回の講演を通して、改めて理学療法を進めて

いく上で、栄養状態の把握が重要であることを実感しました。近年、本邦では、低栄養状態の患者を対象とすることが増加しており、廃用性筋萎縮やこれらに伴う日常生活動作能力の低下などが発生しています。また、低栄養状態であることで、積極的に理学療法を進めていくことが難渋する可能性が高いと考えます。本セミナーは、低栄養状態の患者に対する理学療法を実践する上で必要な栄養学の概説から実践までを詳細かつ専門的に網羅した明日の臨床に応用できる大変意義深いものであったと感じました。

最後になりましたが、ご多忙の中ご講演いただきました高島先生、西岡先生、福島先生をはじめ、卒後セミナーを企画・開催いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。